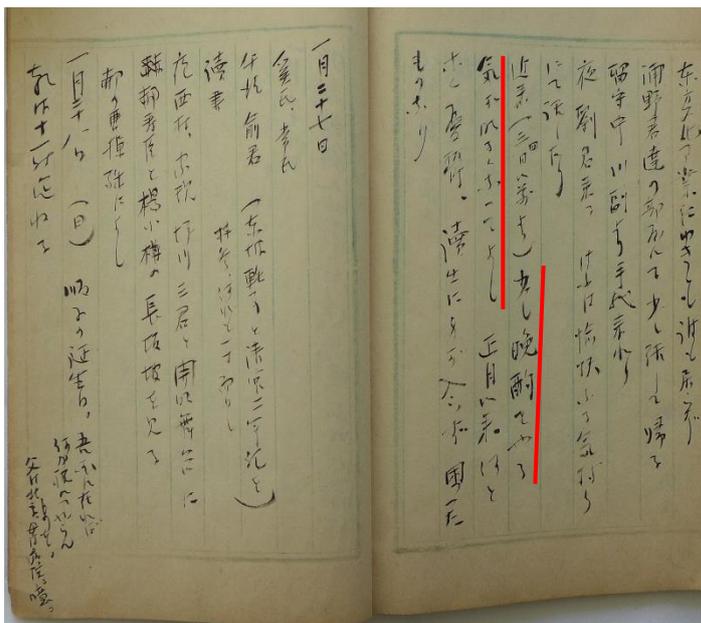


目加田誠先生の『北平日記』 4

今回は久しぶりに目加田誠先生の『北平日記』の中からエピソードを紹介します。『北平日記』は先生が昭和8年から10年まで北京（当時は北平と呼ばれていた）に留学していた時の日記で、令和元年に九州大学中国文学会から『目加田誠「北平日記」—一九三〇年代北京の学术交流』として出版されました。九州大学文学部教授の静永健先生の詳しい注がつけられていてわかりやすい本に仕上げられています。このテキストもおおいに参考にさせていただいています。

【目加田先生とお酒】

目加田先生はけっこうお酒をたしなまれたようです。昭和8年12月31日には、3人で夕食をとりますが、「我一人酒を飲み陶然となり、」とあります。9年1月26日には「近来（三・四日以前より）少し晩酌をやる。気が明るくなってよし。」、3月9日には「晩食に些か酒に酔う。」などと晩酌を楽しまれたようです。ただし、4月1日は転任する仲間の送別会があり、「此の夜、東興楼に於て、酒、量にすぎ、遂にめいてい前後を知らず、」というようなこともあったようです。5月27日にも同じ料理店で送別会があり、「大酔」とあり、翌29日には「昨日の酒にて終日気分すぐれず、外にも出ず。」、そして6月9日には「気分わるし。暫く深酒を禁ずべし。」と書かれています。なんだか、誠先生を身近に感じられませんか。



※『北平日記』昭和9年1月26日「少し晩酌をやる。気が明るくなってよし。」

誠先生は、この日記からおよそ35年後の雑誌『盛』（昭和45年新年号）の「酒徒銘言」欄に、「詩人ののみぶり」というテーマで陶淵明、李白、杜甫などの唐代の詩人の飲みぶりを紹介しています。李白は千金を散じつくして低俗な世の中の馬鹿らしさを美酒の酔いに忘れ、杜甫は長安の朝廷で疎外されて、毎日のように、春着を質においては長江のほろ苦い酔いを買ったと記されています。

また、日本のある中国文学研究者は人も知る酒好きでしたが、李白が好きで「俺は杜甫のようなケチな酒はのまぬ」と言っておられたこと、またある先生は「人と酒をのむのは試合のようなものだ。のめなくなったら、一度吐き出して、またのむのさ」と言って飲まれていたことを紹介されています。そして、その後に、「私はやはり一人静かに飲む方で、散ずべき千金も無いが、酒で人と試合する気にもなれぬ。」と言われて